

「友達経営」 渋谷 修太 著 徳間書店 2022年2月発行

工学教育を受けているという点で同じでも、高専生はマイナーな存在である。のんきなわが校であるが、やはりそう思う。周りにそういうキャリアを歩んだ人がいないのだから、仕方がない。

でも、諦めることはない。図書館は、あなたが知らない知識や経験を集積している。「友達経営」は大好きな友達と一緒にいるために会社を作ったという皆さんの先輩の自伝である。

著者は1988年に長岡高専を卒業し、筑波大学に編入学し、グリーというIT企業経験を経て高専、大学の仲間ら4名と、2011年にITベンチャー・フラー株式会社を創業する。

当初はそのアパートでみんな住み込み、昼夜を問わずに仕事に励んだという。商品はアプリケーションを検索するアプリケーションである。同業他社がどんなソフトウェアを市場に供給しているのかを知ることができる。この目論見は奏功し、おもしろい人材がおもしろい人材を引き寄せ、ベンチャーキャピタルの出資も得られ、著者は会社の特徴を「友達経営」と呼んでいる。現在は出身地の新潟にも本社を置き、2021年12月にはEYアントレプレナーシップ・オブ・ザ・イヤーを受賞している。

学校というものは空気みたいなもので、そのありがたみは、どっぷりつかっていると気づかない。ほとんどが必修科目で、夕方まで続き、自由がないと感じている学生も多いだろう。しかしそれらの学びには意味がある。それは、凡人とエンジニアを分ける基礎的素養である。我慢してそれをやっているから、高校生と違ってコンテストなどに呼ばれたり、大学に編入できたりする。私が言っても説得力がないけど、高専OBの言うことなら信じられるのではないかな？

この本には、高専生であったことへの感謝と肯定的評価が満ち満ちている。高専で出会った友達の大切さも述べられている。ベンチャー創業に興味のある学生にはもちろん、創業というのは大変だ、自分には関係ないと思っている学生にもどうか読んでほしい一冊である。